

Ⅲ まとめ

本校では、平成 23 年度から 2 年間、「一人一人の自己実現につながる学校生活の再考」というテーマで研究を行ってきた。私たちは児童生徒全員の望みや願いを知るために、児童生徒と話したり、行動やことば、表情などから読み取ったりしていき、読み取った望みや願いと保護者の願い、教師の願いをすり合わせて大目標を設定していった。この大目標設定で特に大切なことは、児童生徒本人と話し合って大目標を設定すること、それが難しい場合は本人がその目標を納得して目指すことができること、あるいは本人が意欲的に行動できるような目標にすることである。児童生徒が自分の願いにつながる目標に向かって、持っている能力を発揮して努力していけるようにすることが、私たち教師の役割の一つであることを学んだ。

私たちが期待する児童生徒像は、自己実現を目指すうえで本校の教育観を踏まえて、「自分を見つめ、どうしたいのか、そのために何をするのかを考えることができる児童生徒」「自分と向き合い、将来、自分で目標を見つけてその実現のために努力する児童生徒」である。そういう児童生徒に育ってほしいと考えている。

そのためには、本人にとって最も身近な今の生活から出発し、身近な目標に向かって努力しながら進んでいくことで望む生活を実現できる実感を味わい、その実感を多く積み重ねることが大切になる。身近な目標を成し遂げる過程の積み上げが、将来のより大きな目標に向かって努力することへの原動力になると思われる。

このような考えのもとに、子どもの望みや願いを踏まえた目標を設定して、その目標の実現のために行う学校生活とは、従来の学校生活と何がどう違うのかを考えてきた。

この 2 年間の研究では、学校生活の中でも「授業」に焦点を当てた。即ち、授業の再考である。

ここでは、この 2 年間の研究を通して、自己実現につながる授業づくりとして見えてきたことを以下に記述する。

1. 2つのタイプの授業づくり

本校では、児童生徒の願いをもとにした目標から単元を構成し、学習内容を決めていく方法と、現行の教科・領域等の内容に児童生徒の願いを組み込んでいくという 2 つの方法で授業づくりを行った。

児童生徒の目標（願い）から単元を構成し学習内容を考えた実践では、小学部の実践Ⅰや中学部の実践Ⅱに見られるように、児童生徒が、自分の目標（願い）に向かって、意欲的に取り組み、困難な状況にぶつかった時に、あきらめずにその困難を乗り越えて前に進むことができた。

また、現行の教科・領域の内容に児童生徒の願いを組み込んだ実践では、小学部の実践Ⅱや中学部の実践Ⅰ、実践Ⅲに見られるように、活動を進めていきながら、児童生徒の内面を推察して必要と思われた内容を追加したり変更したりしていくことで、児童生徒が授業のめあてに向かって努力していくことができ、活動性が向上し、既有知識や自己認識の更新・拡大につながった。

高等部では作業学習の中で、生徒と教師で目標を確認して作業内容を決め作業を行っていったところ、生徒自身が目標を意識して取り組むことができ、より活動性が向上した。

また、生徒が各作業に必要な知識や技能を身につけたことで満足してしまう姿が見られ

たことから、生産から消費までの作業全体の流れを、プラタナス委員会や学習発表会の場で生徒全員に知らせたことで、作業に対する目的意識や課題意識をより強く持つ生徒が出てきた。

さらにその生徒同士がより良い製品を作るための改善策を話し合い、作業の方法を見直していくようになるなど、作業への意欲がより高まっていく結果となった。

2. 授業の目標設定と評価のあり方

本校では、年度初めに、児童生徒一人一人の大目標、小目標を設定し、個別の指導計画を立案している。大目標、小目標と関連の深い教科・領域等では、教師がそれらの目標を踏まえて単元や授業の目標を立案している。また大目標、小目標につながっていない教科・領域等では、教師が目標を設定して学習内容を考える際に、児童生徒の願いや強みにつながる内容のものも取り入れている。そのため、授業の目標や学習内容には、児童生徒の願いや強みにつながるものが含まれている。

今年度の取り組みでは、教師が単元や授業の目標を立案することと並行して、児童生徒が授業の始まりに自分自身の目標を立て、授業の終わりに自己評価をする取り組みを行った。授業においては、児童生徒が自ら立てた目標に向かって取り組んでいる時に、教師が児童生徒との会話や、表情、行動から内面を推察しながら支援や環境設定などを行うことで、教師が立案した授業の目標にもせまる結果となることが見られた。

以下に児童生徒が授業における自分自身の目標を立て、授業の終わりに自己評価をすることが、一人一人の自己実現につながる授業づくりに有効であったことについて述べる。

(1) 児童生徒が授業における目標を立てる

児童生徒が授業における自分自身の目標を立てる時には、自分の持っている知識や自分のできることと、授業内容を照らし合わせながら考えていると思われる。

しかし、小学部の児童にとっては、最初から目標を自分で立てることは難しいため、毎回の授業で児童自身がやりたいことや頑張りたいことを考える時間を設けることから始めた。そのことにより、最初は何を言っているかわからない児童も、教師や他の児童と関わって活動しながら、新しい知識を得たり自己認識を更新させたりしていくうちに、徐々にやりたいことが具体的になり、それをことばで表現するようになった。

中学部でも、授業の初めに、生徒が自分のめあてを発表し、生徒全員のめあてを確認していく時間を設定したり、めあてを授業中に確認できるように黒板に書いておいたりしたこと、そして授業後の振り返りで生徒に応じて自分のことばで自己評価をしたり、教師からの評価、友だちからの評価を受けたりする取り組みを丁寧に行ったことで、自分のめあてに対する行いがどうであったかを振り返ることができ、さらに次の授業に向けての新たなめあてを考えることができるようになった。

また、自分のことばでめあてを設定することが難しい生徒には、教師が学習段階において適していると思われるめあてを提示することを繰り返し行ったところ、自分でそのめあてを意識した行動がとれるようになったという成果も得られた。ここで大切なことは、教師がその生徒に適していると考えた目標の妥当性についての検討を行うこと、それと同時に、教師はその生徒が自分の思いを伝える手段を身につけていく手立てを行っていく必要があるということである。自分の思いを自分なりの手段で伝えられるようになることは、自己実現につながる大きな一歩であると考えられる。

高等部のある作業工房では、生徒の様子を踏まえて、最初は、見通しを持つことを目標

とし、見通しが持てるようになった時点で、生徒ができること、頑張れることについて生徒と教師が話し合い、目標を設定するという方法で行った。

これから始まる授業において、児童生徒自身が目標を設定できるように支援することが、将来の目標を設定する姿勢作りにつながると考える。そのための教師の支援として、学習活動に対する目標にせまるための新たな知識の提供や、授業を終えて児童生徒自身が感じた手ごたえ(自己評価)を踏まえて次時の目標を決めるための話し合いの時間設定などが必要となってくると考える。また、教師は児童生徒の思いを理解しようと努力し、児童生徒の主体性を大切にしたい授業づくりを行っていくことで、児童生徒は教師の要求(社会的ニーズ)を受け入れ、高等部段階になると、より卒業後の生活を見据えた目標を意識し、それに向かって努力しようとする姿を見せてくれるのではないかと考える。

(2) 評価のあり方について再確認する

児童生徒がこれから始まる授業において自分で自分の目標を設定して、授業終了時にその目標にどれだけせまれたのかを自分で評価する、いわゆる自己評価を授業に意識して取り入れてきた。

小学部の実践Ⅰでは、授業の終わりに頑張ったことを振り返る時間を設けたところ、「頑張った」「できた」とだけ発言する児童がいたので、何を頑張ったかを伝えられるように、教師はさらに質問をして児童の思いを引き出そうとした。その時、すぐには答えられなかったが、少しずつ児童が自分の知っている単語で伝えようとするようになった。

児童が自分の行動を振り返ることができるようになるためには、時間はかかるが丁寧に具体的な観点を示して聞いていくことが大切であることを実践から学んだ。そしてそれを繰り返すことで、自分は何ができたのかがわかるようになり、次に何をしたいかが具体的なことばとして表現できるようになるのではないかと考える。

中学部の作業学習の実践では、作業の終わりに自分の作業についての振り返りをした後、友だちや教師からの評価を受けたりして、自分の振り返りの捉え直しをする生徒がいた。その時、教師の評価の観点として大切にしたのは、作業でペアを組んでいる相手にとって作業しにくい点はなかったかということである。この評価の繰り返しにより、その生徒はペアの相手の動きやすさにも意識が及ぶようになり、めあてを立てる時にもペアの相手を考慮した内容が出てくるようになった。

これらに共通して言えることは、「児童生徒に具体的な観点を示して評価できるようにする」ということである。そのことにより、児童生徒は授業の中で、何をどうしていったらよいかが具体的にわかり、より自分のめあてに向かって努力できるようになると考える。

高等部では、他者評価、自己評価、相互評価を生徒に応じて行ってきた。その際、教師による評価は、教師によって大きな違いが出ないように、指導・支援の方向性や生徒の様子から推測したことなどをもとに教師間で話し合いを重ねていく必要があることを学んだ。

また特に高等部段階で可能になってきた生徒同士による相互評価は、相手の人格を否定するような評価ではなく、相手の行為に対する評価を行えるような支援が必要であった。

(3) 子どもの内面にせまる評価の視点を持つ

児童生徒が持っている能力を発揮できる背景には、ICFの生活機能モデル(9ページ参照)で示されている環境因子(物的環境・人的環境・制度的環境)、主観的次元である内面世界が大きく関係しているということを学んだ。つまり、児童生徒の望み・願いに基づく

目標を設定することは、児童生徒の内発的動機づけとなり、目標に向かって持っている能力を発揮できることにつながることで、そして目標に向かって取り組んでいる時に、教師が児童生徒の内面に目を向けることで、子どもにとって実感が持てる授業の立案、実践、評価が行えると考えている。

3. 授業において子どもが目標に向かって取り組めるための教師の役割

(1) ICF の生活機能モデルから子どもの能力を捉える

ICF の生活機能モデルでは、活動欄の中を「できる活動」と「している活動」の2つに分けている。「できる活動」というのは、ある特定の条件でできる、という活動である。「している活動」というのは、いつでもどこでもできる、という活動である。このことから言えることは、能力は環境や条件により発揮のされ方が異なるということである。

中学部では、作業学習で失敗経験が多い中学部の生徒が、「自分はできない」と思って、いつも教師の助けを借りていたが、その生徒のできないと思っている要因を推察し、「できる活動」は何かに着目して教具の工夫を行ったところ、自分から作業に取り組むようになり一人でできるようになった。そしてできる経験を積んだことで、自信につながり、生徒が自ら新たな目標を持つようになった。

高等部では、指示待ちが多く、長時間仕事をする経験がなかった生徒が、「作業に取り組める自分」を意識できるように、生徒一人一人の強みやできることを生かした仕事を担当するようにしたり、「している活動」から考えた治具を用意したりすることで、長時間、作業に取り組めるようになったという実践があった。

教師は児童生徒の内面を推察しながら「できる活動」「している活動」は何かを把握し、今できている状態からあと少しでできる状況を作っていくことが大切である。つまり、児童生徒が、得意なことを発揮できる状況を作ること、さらに「やってみたい」「これならできそうだ」と思って行動できる環境設定や教材・教具の工夫を行うことが大切であると考ええる。

(2) 一人一人の思いを大切にしたい仲間集団をつくる

能力を発揮できる環境としてもう一つ大切なことは、仲間集団である。

児童生徒は仲間集団の中で、友だちの様子や周りの状況を見て、既有知識や自己認識を更新・拡大したりしていくことがある。また、その中で自分を発揮できたり、友だちや教師から認められたり褒められたりした時に、自己効力感や自己有用感を高めたりしていく。

これらのことから、仲間や周りの状況を意識できるような環境設定、あるいは児童生徒一人一人が力を発揮できるような状況づくり、さらに児童生徒同士をつないでいき、仲間同士が助け合って活動を行っていけるような教師の支援が必要となってくると考える。

また時には、仲間同士がお互いの「こうしたい」「こうありたい」という願いから、衝突することがあるが、教師はお互いの思いを読み取って代弁していくことを丁寧に行っていくことで、児童生徒は相手が自分とは違う思いを持っていることが理解できるようになったり、今まで抱いていたその児童生徒に対する思いや関わり方も変化していくことが期待できる。

児童生徒は仲間集団の中で、既有知識や自己認識を更新・拡大したり、自己効力感、自己有用感を高めたりしていく。またその中で自己のコントロールや生活に必要な力を身につけていく。教師は児童生徒一人一人の思いを大切にしながら、仲間同士の関わりの場を

設定していくことが大切な役割であると考えてる。

今後も私たち教師は、自己実現につながる授業づくりとして、何が大切であるかを模索する努力を続けていきたい。

【参考文献】

1. 茂木俊彦（2009）「障害児教育を考える」岩波書店
2. 白石正久（2010）「発達をはぐくむ目と心」―発達保障のための12章 全障研出版部
3. 二宮厚美・神戸大学附属養護学校編著（2005）「コミュニケーション的關係がひらく障害児教育」 青木書店
4. 別府 哲（2009）「自閉症児者の発達と生活」全障研出版部
5. 金沢特別支援教育 ICF 研究会編（2008） 「特別支援教育と ICF」
6. 本校研究紀要 平成 22 年度 平成 23 年度